

新型コロナウイルス感染症疑いの肺炎患者症例

日本中医薬研究会理事 副会長
よろず漢方薬局 薬剤師
萬代 誓

COVID-19 感染拡大に伴い 2020 年 4 月 7 日に緊急事態宣言が発出され、日本に住む多くの人々が緊張を余儀なくされているさなかの 4 月 15 日に電話相談があった 84 歳女性の肺炎症例について報告する。

患者の女性は当日朝、急に発熱（38 度）し、寒気を感じたが、徐々に胸が苦しくなってきたため、夕刻に病院受診した。病院での検査の結果、肺に影が認められ、肺炎と診断されたが、肺炎としては軽症との判断で、発熱期間も基準を満たしていないため、COVID-19 の検査は出来ないと告げられ、肺炎の薬が処方され（具体的な薬剤名は不明）、自宅安静を指示された、とのことであった。

緊急の様子で情報が少なかったが、「外感風寒」と判断して「麻黄附子細辛湯」を服用いただき、さらに COVID-19 であることも考慮し、舌苔が厚い場合には「勝湿顆粒」の服用をお勧めした。

3 日後に連絡があり、現在の熱は 37.1℃、胸の痛みが続いているが、寒気は無くなったとのことであった。食欲はあまりないが、便通は良く、喉痛や発汗もないとのことで、「小柴胡湯」「銀翹散」「越婢加朮湯」に処方変更した。なお、舌苔は厚くなく、「勝湿顆粒」は服用しなかったとのことであった。

その後、4 月 25 日に連絡があったが、熱も下がり、胸苦しさも無くなって、通常の生活に戻ったとの話であり、看護していた同居の方 2 名にも以後症状は見られなかった。なお、同居の方には患者発熱当初より「衛益顆粒」を服用いただいた。

今回の症例は、COVID-19 による肺炎であったかどうかの確認は取れていないものの、漢方薬の服用により症状は速やかに軽減した。また、周りに呼吸器症状を訴える方が出なかった。

今後、万一感染拡大が生じた際も、漢方薬による早期対処と、看護者に対する漢方薬の予防のための服用が有効であることが示唆される。